

丘女史と加島さんのこと

新井宏

今年(二〇〇八年)、加島淳一郎さんが中国の河北省泊頭市の名誉市民に推戴された。また、その機会に、加島さんは上海交通大学で博士課程の学生を対象に講演を行った。上海交通大学と言えば中国でも五指に入る超難関の名門大学である。しかも、講演の一部は中国語で行ったとのこと、加島さんならではの感心している。

加島さんは、永らく株式会社オーバルに勤務され、社長、会長を経て、今は事業の一線から退かれたが、現在でも業界発展のため日本計量振興協会の副会長を勤められている。

加島さんとは、日本計量史学会と一緒に理事を務めている間柄であるが、加島さんの会社「オーバル機器」には、私にとっては忘れえぬ思い出がある。

私が日本金属工業に入社してまもなくの頃、放射線を使ったステンレス鋼铸件の内部欠陥検査を担当していた。その頃、オーバル機器向けのギア部品は、精密铸造品で品質検査も厳しかったが、ある時期から急減した。理由は、铸件で作るのを板材の溶接構造に変更したためであった。急減は問題ではあったが、その技術開発にいたく感心してしまった。それからの長い技術活動の中で、自分の発想のよりどころとしてばかりでなく、折にふれ、部下たちにも絶好な開発事例として紹介し続けていたのである。

その加島さんには、二〇〇五年、北京で行われた第二十二回国際科学史学会で大変にお世話になった。(株)オーバルは北京にも事務所を構えているが、それは北京の有名な新僑飯店の中にある。帝国ホテルに事務所を構えているようなものだが、そのレストランの晚餐に日中の計量史関係者が十名ほどが招待されたのである。

日本からは、計量史学会副会長の松本栄寿さん、東洋大教授の大網功さん、京都工繊大助教授の西田雅嗣さんが出席したが、中国からは世界的に著名な計量史学者の丘光明女史。や上海交通大学人文学院副院長の関増建さんのほか、高位の行政関係者も出席した。

加島さんは丘光明女史とは初対面の様子であったが、丘光明女史の論文を翻訳して数回にわたり『計量史研究』で紹介されている間柄である。

ところで、私にとって丘光明女史は、旧友と言っても過言でない。それは一九九二年フランスのリール市ドゴール大学で行われた第六回国際計量史学会の時であった。大部分の出席者は東欧を含むヨーロッパ勢の中で、日本からの出席者は私と妻だけ、中国からは三名でその中に丘光明女史もいた。

三日間にわたって行われた学会は、ヨーロッパの例として昼と晩に食事会があり、市長から差し入れのワインを飲みながら盛り上がるが、共通語は英語と言うよりもむしろフランス語やドイツ語である。妻のように着物を着て、折り紙を披露したりすると簡単な英語でも会話が成立ち、むしろ私よりも交流ができたようであった。

ところが、丘光明女史の場合、服葬も質素で英語にも全くなじみが無く、どうしてもひとりぼっちになる。そこで登場したのが古典的な「筆談」である。妻と私はパーティが終わってから丘女史と長時間にわたって筆談を楽しんだ。

その時に伺ったことでは、父上が中国の知識人で詩作にも優れていたが文化大革命で失脚し、苦しい生活であったこと、美術関係を学んでいたのも、最初は計量器の遺物の整理に携わっていたが、それが今日の学者への道につながったこと、お子さん達のことなどなどであった。

その関係もあって、一九九五年に日本計量史学会が丘女史を日本にお招きした時は、もちろん私たちも歓迎会などで再会した。その後も、中国の著名な考古学関係者にお土産を託けて下さったり、丘女史の弟さんやご子息関係者が日本に来た時にはお迎えしたり、年賀のあいさつの他に著書や論文の交換などを続けていた。

北京で再会した時には、「お土産」を持参した。実は、そのお土産は一九九七年にドイツのジーゲン市で行われた第七回国際計量史学会で妻からお渡しする予定で準備したものであった。しかし、丘女史の参加がなく、そのまま八年間も我が家に眠っていたものである。

レストランの晩餐では加島さんが事務所の方々を大勢通訳として動員して下さった。その中でも所長代行ともいふべき女性は臨月を迎えながら、素晴らしい日本語で通訳して下さり、専門分野の話でさえ全く不自由がなく、大変に感心した。その時初めて「筆談」時の誤解が明らかになったことさえあった。いずれにしても、加島さんには大変にお世話になった。名誉市民、おめでとうございます。

(前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)